

研究分野のキーワード：学校方言，近代語，戦前台湾での国語教育，外国人児童生徒支援教育

研究紹介

私は日本語学を専門としています。特に学生時代から方言学を学び、静岡県や東京都の伝統的な方言を調査研究してきました。今、最も関心があるのが学校方言です。例えば「放課」（休み時間のこと）という学校方言、これは全国で愛知県だけに分布し、隣の三重・岐阜・静岡県では決して聞かれません。何故このような結果になったのか、明治からの歴史的変遷も含めその分布の背景を探っています。同様の言葉として「B紙」（模造紙のこと）は愛知県下に、「屋運」（体育館のこと）は一宮市に、「脱履」（ダツリ 昇降口のこと）は江南市にみられ、そして昇降口は名古屋市内では「土間」と呼ぶのが普通です。通学のグループを「通学団」「分団」などと呼ぶのも愛知県の特徴です。学校を中心とした地域社会で成立している方言を学校方言と呼び、一般の方言との違い、その成立の背景などを研究しています。

実は学校方言は明治以降の近代語が深く関わります。「放課」も明治期学校制度が始まった際には全国どこでも普通に「放課」と呼ばれていました。それが全国で言わなくなってしまった結果愛知県だけ取り残されたというのが真実です。「黒板消し」という言葉は、明治から始まる教室での一斉授業の中で学校用具として誕生しました。語史的には、「塗板（ヌイタ・パソ）・黒板」＋「拭う・拭く・消す」の組み合わせで、各地でそれぞれ使われました（愛知県では「拭い」ヌグイもありました）。鹿児島県の「ラーフル」は学校方言として有名ですが、これは文具メーカーの正式名称として用いられているのです（教室の黒板消しのラベルを、ホワイトボード用も含め、一度見てみてください）。このような観点から近代語研究も進めています。

さて、この明治期は日本語の標準語が確定されていく時代でもありました。「おとうさん・おかあさん」というのは東京では「おとつあん・おっかさん」というのが普通でした。明治37年から使用された最初の国定教科書で「おとうさん・おかあさん」と使われたことで全国に流布しました。しかし、「いる・おる」、「行かない・行かん」は、標準語をどうするか揺れる中で、いち早く植民地とされた台湾での国語教育では「いる・行かない」が採用され、明治33年から使われた台湾人向け教科書に載せられました。その意味で台湾で編纂された国語教科書（全5期）も近代語を研究する上で大きな意味があり、現在、この研究も行っています。

また、植民地で外国語である日本語を「国語」として勉強した当時の台湾の人々のことを考えると、今愛知県に多く就学している外国人児童生徒の教育に関しても目が自然と向けられます。彼らには教育を受ける権利があり、日本政府には教育を保証する義務があります。そして我々ことばの教育に携わるものは、外国人児童生徒に日本語習得のみならず教科支援も的確に行うことで、彼らが将来日本社会を選択した際に自由に活躍できるよう応援する必要があります。そのための教材開発をしたり、また教員として巣立っていく大学生に外国人児童生徒の理解と共感、そして支援の具体的な手立てがどうあるべきかを伝えると同時に、そのための教科開発も日々行っています。